

澤瀉久孝編

源氏物語

桐壺抄
帚木抄

白
楊
社



V. Longobardi

Wagatawa

澤瀉久孝編

〔新注古典選書 3〕

源氏物語

桐壺抄

帚木抄

白
楊
社

昭和二十三年一月五日 印刷
昭和二十三年一月十五日 發行

源氏物語

定價貳拾五圓

編者

澤瀉久孝

發行者

小泉桂

印刷人

京都市下京區河原町梅小路上ル
中村勝治

發行所

京都市上京區小出初音町五
白楊社

會員登記A二〇八〇七八番
電話西陣〇七一六七番
振替京都二五〇七四番

東京都千代田區淺草橋二ノ九

配給元

日本出版配給株式會社

凡 例

- 一、本書は高等學校程度の諸學校の國語科副讀本として編纂したものである。
- 二、本書の本文は最も流布する北村季吟の湖月抄によつたが、時に、尾張徳川黎明會藏の河内本との校異を頭注した。尾本と記したのがそれである。
- 三、頭注は、引歌・出典を主とし、間々、文脈を解き、文意を述べ、また觀照の手がかりを記したこともある。
- 四、この冊は、桐壺の前半と、帚木の雨夜の品定めとを收めた。
- 五、有職の参考にもなるやうに挿繪を入れた。京都大學文學部國語學國文學研究室所藏の古刊本を縮寫したのである。
- 六、本書の編纂にあつては主として玉上琢彌氏の協力を得たものである。

昭和二十三年一月

文學博士

澤 瀉 久 孝

か、子の文部と文部らしきより好ましくあるのである。すなわち五十四神は五十四の歌謡である。光武は、我升小鏡する主人公の歌なり。各神の歌は子孫中心となる文部歌なり、光武の薫る中心とする宇部十神は、子の間の蘇我の三神と云ふたて著へる所である。しゆし、光武の神の歌も出ち所である。この五十四神は、普賢、光武を主人公とする四十一神は、子の干である。子孫は光武神謡五十四神は、多くの人々の心の糧となり、こまやの良のめりなり、譽の、味部の対江し、日張文學の養ひは心野神寫を尊き入所なり、藤しの文學蘇左を神りもたひのちりたるなり。ちり神謡は、文部神を良き入所なり聞く昔謡の事なりは、榮左陪は、子孫の精文の部りて文學の謡めりするところなり、別各日張の文部神案は、神の書白の蘇左りしり頼の蘇左りたるして古今業を著き、もた土は日張の蘇左りたるなり。子孫以來、味部の一體平安部升の文學するへは、萬精文を著へる。貫は、味部の萬精の対江するところなり、萬文子孫よりと百争りる昔、蘇部天皇の神の、蘇貫は神の、別各を動して文學を神りなり。光武神謡を榮左陪は書ひたるは、一刺天皇の神の事なり、今や三百三四十争の昔である。

り、源氏物語は連作の短篇集であり、一兩人の主人公を追及する近代小説ではなく、むしろバルザックやゾラなどのこころみたやうな、世相、社會を描かんとしたものといへる。各帖がこのやうに獨立的なのは、五十四帖が一時に執筆され發表されたのではなくて、長い年月をかけて、何回にも分けて作られて行つたからなので、今日の連載小説のごとき成立事情であつたのである。それで、一帖一帖の構成は十分注意され、一つの基調で統一されてゐるし、帖と帖との續け方も十分變化の妙を考慮されてゐて、その點では五十四帖その順序をおつて楽しむべき、完成した藝術作品となつてゐる。かくして長篇物語といふ文學様式は確立したのであるが、この様式を一層完全にしたのが狹衣物語であつた。それで、以後の物語類は、狹衣物語に倣ふものが多く、源氏物語の影響を決定的にうけたのは、むしろ和歌の世界であつた。源氏物語に始まつた引歌の技巧は、新古今集の本歌どりになり、人の心と合致する自然描寫は、象徴的詠歌となり、また、物語に描かれる情景は、歌ごろの參考になるものとされた。かく、歌人、さらに歌學者が、此の物語を典據とすることになつて、源氏物語の古典としての地位はゆるぎなきものとなつた。わが國の文學の主流は和歌であり、文學を論じ研究するものは、歌學者と、それを繼ぐ連歌師や國學者であつたから、その崇拜をうけることは、すなはち全國民の

崇拜をうけることになるのである。

源氏物語の注釋は、平安末期にはじまり、世尊寺伊行の源氏釋以下おびただしいものであるが、特に見やすい翻刻のあるものを、この解題の末に表示する。本文としては、鎌倉初期藤原定家の校訂した青表紙本が長く行はれ、同じころ鎌倉の地で源光行親行父子の校訂した河内本は、室町時代中期以後は採るものがなく、久しく埋れてゐた。武州カネザハ金澤文庫の創設者北條實時は、寫させた本が、完全な姿で尾州家に傳はりそれが複製されて、學界を驚喜させたのも十年の昔になる。本書は青表紙系でも最も流布する湖月抄を底本としたが、時々この尾州本の異同を頭注に掲げた。

作者紫式部の父、藤原爲時は、當代有數の漢學者で、そのおしこみで、作者は漢詩文の教養も深かつた。作品が内容的にも深いものを含んでゐるのは偶然でない。兄の惟規も歌人として幾つかの逸話を傳へてをり、曾祖父には延喜時代の有名な歌人堤中納言兼輔があり、祖父雅正も勅撰集に歌をとどめてゐる。作者の環境は文學的であつたのである。紫式部は一門の藤原宣孝と結婚したが、兩三年で死別し、あとは一女を抱へて創作に精根をかたむけた。寛弘四年十

二月、氏の長者道長の姫、一條天皇の中宮彰子に召し出されて、當時の文化の中心たる宮廷に入つたことが、源氏物語の創作に大きな影響をあたへたことは否定できない。寛弘五年ごろ、源氏物語の一部は流布し、當時の文化をになつて立つ方々、一條天皇、藤原道長、同公任らの話題に上ることさへあつた。物語は、女子供だけのものではなくなつたのである。彼女は長和四、五年ごろ死んだと推定される。歿年は三十九歳ぐらゐかといふ。紫式部といふ名は、侍女としての呼び名で、實名はわからない。この呼び名も、「紫」は源氏物語の若紫の巻と關係があらう。「式部」は、父が式部省にゐたところから附いたのであらうといふ。一女、名は賢子、後冷泉天皇の御めのと、越後の辨と呼ばれたのは、祖父爲時が左少辨や越後守になつたからであらう。のち正三位太宰大貳高階成章と結婚したので、大貳三位といふ。歌人として有名で、小倉百人一首にも母親と並んで採られてゐる。

源氏物語五十四帖の第一帖が桐壺であるが、これは發端として、光源氏の出自を説明するために、後から書き添へたものらしい。帝の殊寵をたまはる桐壺の更衣が、後宮の嫉視をうけ、宮廷から擯拆され、つひには天下の話題ともなる。やさしい更衣は病弱となり、それで、帝の

のさし雲霧の巻に、光感刃の天衣部示ちり、あつち子の子の薫さ中心とする聲議とある。

る主部。すけは、四十のヌキイライトイの辭へるに、四十神の神語に於てある。各々の文人の管絃と心の傾漉。吾輩ちりてのその榮華と、すけさ禱る人々の、喜びのこそ悲しやとある大田氏の露言をちりて、良響・即ちの良さをちりてちりともあつた。その露、感刃さゆぐる人心結と夫娘結もある。まづ、父帝の崎嶇立、龍崎、式大田の庭廿餘、公館主部昔日の如く、了文掛遊藝さちりぬる。しひに、蕪壺の独の榮の上を昇るの式は、すけまじりぬるこころ苦こころ味壺の巻おれる。感刃の昔、さき母母を慕ふ心は、蕪壺を思ひ、すけに如く人を來ぬくと、東宮と子の母文崎を戀する式大田氏の體して、蕪壺・感刃・式大田の黨は諒知ちりた。幾願お實部して。帝は、當朝如辭を慰る崎嶇の式大田の愛難さ、元服を戀に感刃に願し、はのさ、蕪壺の文崎を昇るに、感刃とちりて願さるに、さゆの第一皇子（今ち東宮）の母文崎のす、臣辭に如し、感の刃ささちり、崎嶇愛の由である。ちり帝は、ささち更文さしりての文崎へ又權派の一員とあり、更文おしひに謀派する。その出の皇子は、帝の榮に崎思難崎難おまじ、對宮の幾願おしよしよ願まる。皇子崎嶇主部は、第一皇子の母母、式大田の賦

ここに收めたのは、桐壺の前半、更衣の死と帝の御悲歎のところまでと、第二帖帚木の前半、雨夜の品定と呼ばれる段とである。桐壺の前半は、まつたく、唐の白樂天の長恨歌の變奏曲である。白氏文集は平安時代知識人必讀の書であり、殊に長恨歌は言々句々そらんにてゐたところである。それで此の部分は、當時の人々には特に興ふかく思はれたことであらう。漢詩文に依つて物語を文學たらしめようとした苦心は察すべきである。さて出來上つたものについては、わが國最初の批評文學、鎌倉初期の無名草子に、「桐壺にすぎたる卷やははべるべき。いづれの御時にかとうちはじめたるより、源氏初元結のほどまで、言葉つづきありさまをはじめ、あはれに悲しきこと、この卷にこもりてはべるぞかし。」と記してゐるが、發端としての桐壺を賞讚するほかに、措辭表現を賞揚したものである。たしかに桐壺は、五十四帖中でも文章は特別こつてゐる。一語一句心して描かれてゐることは、萩原廣道の評釋にもほゞ注意してある。

帚木の卷の雨夜の品定めは、源氏の君と、義弟（舅左大臣の子）頭中將が、年長の左馬頭を中心に、式部丞も加へて、女性論議を行ふので、作者の婦人觀が知られる。その穩健な思想は、いつの世にも通用し得る結論を示し、女子教育論として有益なものとされてゐる。それは

鶴 越刃 咄語 精撰 鳥事八基

四(芥菜)、五(未離芥・藤葉賢・芥寔)
一(耐壺・掃木)、二(掃木・空馳)、三(又隨)、

越 鶴 越刃 咄語 (雲野まろ)

野越豊管・武々羅雲・並川詔風

越 刃 咄語 精撰 (芥寔まろ)

藤原勘能 岡文持騷全集・巖園書院刊本

越 目 越

肝本まろ 巖園夏樹館館肝本・吉野軒士対肝本・青川瓦斎館館

越 五 人 越

中割直經 同 本・岡文學持騷全集

越 赤 越

三割西公割 同 本

越 鳥 翁 越

一割兼見 同 本

越 赤 越

四上善短 岡文持騷全集

越 刃 咄語 奥入

蕨原宝案 辨書殿翁咄語卷第三百十五

越 刃 越

蕨原増行 未肝岡文古指騷大系卷十一冊

越 騷 書 本書に引用したものは、その出所は見るべきものでない。

たのむ。

さしあげ、咄語の、この齋語の越刃の吾の如く開か、「世の中」に世を出すところの

對譯源氏物語 宮田和一郎 須磨明石までと宇治十帖

源氏物語總釋 諸氏

對源氏物語新釋 吉澤義則

研究書 特に一讀すべきもの

玉の小櫛 本居宣長 其全集各版

源氏物語新考 島津久基

源氏物語に關する論考 中古國文學叢考第二分冊 池田龜鑑

紫式部 (岩波講座日本文學ノ内) 石村貞吉

源氏物語研究書目要覽 藤田德太郎

現代語譯

新譯源氏物語・新新譯源氏物語 與謝野晶子

全譯王朝文學叢書ノ内 諸氏

潤一郎譯 源氏物語 谷崎潤一郎

續文
獻通

正
土
海
賦

庭升
詩
賦
五
卷

巖田
空
齋

桐 壺

一 百年程前の事件として物語る建前なのである

二 后の下、更衣の上

三 「評釋」人の妬むに
よりに里にすみがちな
れば、逢給ふこと遠く
はれにおよ／＼飽ずあ
はれにおぼえ給

四 上達部、三位以上
及び参議

五 殿上人、四・五位
及び六位藏人

六 長恨歌傳「京師長
吏爲是側目」

七 後宮から朝廷に、
そして遂に國內一般の
噂になつた

八 唐の玄宗は初め善
政を布いたが、楊貴妃
を寵し、安祿山の亂となつた。これを歌つた
のが白樂天の長恨歌である

いづれのおほん時にか、女御更衣あまた侍ひたまひけるなかに、いとやむご
となききはにはあらぬが、すぐれて時めきたまふ、ありけり。はじめより我
はと思ひあがりたまへる御かた／＼、めざましきものに、おとしめそねみた

まふ。おなじほど、それより下臈の更衣たちは、まして安からず。あさゆふ
の宮づかへにつけても、人の心をうごかし、うらみをおふつもりにやありけ

む、いとあつしくなりゆき、もの心ぼそげに里がちなるを、いよ／＼あかす
あはれなるものにおもほして、人のそしりを、えはゞからせたまはず、世

のためしにもなりぬべき御もてなしなり。かんだちめ、うへ人なども、あい
なく目をそばめつゝ、いとまばゆき人の御おぼえなり。もろこしにも、かゝ

る事のおこりにこそ、世も亂れあしかりけれ、と、やう／＼、あめの下にも、
あぢきなう、人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃のためしも引き出でつべ

一 夏衣の母で大納言
の北の方(奥方)
故大納言

北方 — 更衣

帝 — 二宮

二 「評釋」さへといへ
るは、男御子なる故に、
殊にめでたき意にてい
へる也
三 御産は里でするの
である
四 「評釋」主客の法：
…一のみの御勢ひ
のいみじきことを揚い
ひて却てそれにもまさ
る若宮の御寵愛の甚し
き事をいへる抑揚いと
めでたし

右大臣 — 女御 — 帝 — 一宮

うなりゆくに、いとはしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへのたく
ひなきをたのみにて交らひたまふ。

父の大納言はなくなりて、母北(三)の方なむ、いにしへの人のよしあるにて、親
うち具し、さしあたりて世のおぼえ花やかなる御方(一)にもおとらず、なに
ごとの儀式をももてなしたまひけれど、とりたててはかくしき御うしろみ
し無ければ、こととある時は、なほ、より所なく心ぼそげなり。

さきの世にも御ちぎりや深かりけむ、世になくきよらなる玉の(三)をのこ御子(二)さ
へ生まれたまひぬ。いつしかと、心もとながらせたまひて、いそぎ(四)参らせて御
覽するに、めづらかなるちごの御かたちなり。一の御子は、右大臣の女御の
御はらにて、よせ重く、疑ひなき儲けの君と、世にもてかしづききこゆれど、

この御にはひには並びたまふべくもあらざりければ、おほかたのやむごとな
き御おもひにて、この君をば、わたくしものにおもほしかしづきたまふこ
と、かぎりなし。

一 尾木「母君ははじ
めより」
二 「細流」女御更衣は
別殿に祇候して時々こ
そぶらふべきを、此
人は典侍などのやうに
御前さらずめしまどは
せば、かへりてかろ
くしきなり、寵愛甚
しき餘り也
三 長恨歌「承_レ歡侍
宴無_レ間_レ暇」。春從_レ春
遊「夜_レ專_レ夜」。

四 「評釋」源氏君の方
と御中のよかるまじき
事のよしをいへるついでに
帝も弘徽殿をば憚
らせ給へる事を擧げ
て、弘徽殿方の御威勢
の争ひがたきさまをお
らはせり

はじめより、おしなべてのうへ宮づかへ、したまふべききははあらざり
き。おぼえいとやむごとなく、じやうずめかしけれど、わりなくまつはさせ
たまふあまりに、さるべき御あそびのをりく、なにごとにも、ゆゑある事
のふしくには、先づまうのぼらせたまふ。ある時には、おほごのごもりす
ぐして、やがてさぶらはせたまひなど、あながちに、おまへ去らず、もてな
させたまひしほごに、おのづからかるき方にも見えしを、この御子うまれた
まひてのちは、いと心ごとにおもほしおきてたれば、坊にも、ようせずば、
この御子の居たまふべきなンめり、と、一の御子の女御はおぼしうたがへり。
人よりさきに參りたまひて、やむごとなき御おもひなべてならず、御子たち
などもおはしませば、この御方の御いさめをのみぞ、なほわづらはしく心ぐ
るしう思ひきこえさせたまひける。
かしこき御かげをばたのみきこえながら、おとしめ、きずを求めたまふ人は
多く、わが身はかよわく、ものはかなきありさまにて、なかくなる物思ひ

一 漱景舎。中庭に桐を植える。後宮の東北隅。清涼殿は西南隅

二 取り外しする板橋や、渡り廊下

三 是非通らねばならぬ中廊下。馬道と書く

四 こうらうでん、清涼殿の西にある

五 お側によつた時の休息所

六 中務省内藏寮

七 帝室の納殿は宜陽殿にある

をぞしたまふ。御つぼねは桐壺なり。あまたの御かたぐをすぎさせたまひつゝひまなき御まへわたりに、人の御心をつくしたまふも、げにことわり、と見えたり。まうのぼりたまふにも、あまりうちしきるをりくは、うちはし、わたごの、ここかしこのみちに、あやしきわざをしつゝ、御おくりむかへの人のきぬの裾たへがたう、まさなき事どもあり。また、ある時は、えさらぬめだうの戸をさしこめ、こなたかなた心をあはせて、はしたなめ、わづらはせたまふ時もおほかり。事にふれて、かずしらす苦しき事のみまされば、いといたう思ひわびたるを、いとゞあはれと御覽じて、後涼殿にもとよりさぶらひたまふ更衣の曹司を、ほかに移させたまひて、うへつぼねに賜はす。そのうらみ、ましてやらむかたなし。

この御子みつになりたまふ年、御はかまぎの事、一の宮のたてまつりしにおとらず、くらかさ、をさめどのものをつくして、いみじうせさせたまふ。それにつけても世のそしりのみ多かれど、この御子の、およすけもておはす

一 若宮の御袴着のあ
つた年の夏は、更衣の
弱つた體にこたへたの
である

二 御息所、御子を生
み奉つた方をいふ

三 「湖月」前にも、い
とあつしくなりゆき、
とあり

四 「湖月」のみといふ
詞にて、度々御暇を申
せども御ゆるしなき心
こもれり

五 若宮御同列では、
退出が一般に知れ、わ
るだくみにあつては、
若宮まで恥となるから

六 さてその退出の際
の御別離のさま

る御かたち心ばへ、ありがたくめぐらしきまで見えたまふを、えそねみあへ
たまはず。ものの心しりたまふ人は、かゝる人も世に出でおはするものなり
けり、と、あさましきまで目をおごろかしたまふ。

二 その年の夏、みやすん所、はかなきこゝちにわづらひて、まかんでなむとし

たまふを、いごま、さらにゆるさせたまはず。としごろ、常のあつしさにな

りたまへれば、御目なれて、なほしばしこゝろみよ、このみ宣たまはする

に、日々におもりたまひて、たゞ五六日のほどに、いとよわうなれば、母君、

泣く／＼奏して、まかでさせたてまつりたまふ。かゝるをりにも、あるまじ

きはぢもこそと、心づかひして、御子をばとゞめたてまつりて、しのびてぞ

出でたまふ。

かぎりあれば、さのみもえとゞめさせたまはず。御覽じだに送らぬおぼつか

なさを、いふかたなくおぼさる。いとにほひやかにうつくしげなる人の、い

たうおもやせて、いとあはれどものを思ひしみながら、ことに出でてもきこ

一 西宮記一盤、太子
老親王大僧正等依宣
旨乘之宣旨は最も簡
單な形式の勅命
二 一旦は退出をおゆるし
になつたが、桐壺
へ別れにお出でになつ
ては

三 帝詞

四 更衣詞。生く（行
く）は道の縁語
五 〔評釋〕四つのげ、
他より推量りたる更衣
の様なれば也
六 〔花鳥〕帝の御返歌
なきにて御心も心なら
ず思し迷へる程を知る
べき也
七 人々詞

えやらず、あるかなきかに消え入りつゝものしたまふを御覽するに、きしか
た行く末おぼしめされず、よろづのことを泣く／＼契り宣たまはすれど、御
いらへもえきこえたまはず、まみなどもいとたゆげにて、いとゞなよ／＼と、
われかの氣色にて臥したれば、いかさまにか、と、おぼしめしまどはる。て
ぐるまの宣旨など宣たまはせても、また入らせたまひては、さらに許させた
まはず。

かぎりあらむみちにも、おくれさきだたじと契らせたまひけるを、さりとも、
うちすてては、え行きやらじ、と宣たまはするを、女も、いといみじ、と、
見たてまつりて

かぎりとて別るゝ道の悲しきにかまほしきは命なりけり、いとかく思う
たまへましかば、と、息もたえつゝ、きこえまほしげなることはありげなれ
ど、いとくるしげにたゆげなれば、かくながら、ともかくもならむを、御覽
じはてむ、と思しめすに、今日はじむべき祈りども、さるべき人々うけたま

一 ふたがるのは御胸
はかり、御目は少しも
ふたがらぬ

二人々詞

三 七歳以下は喪に服
するに及ばぬとは延喜
七年の制である。これ
はそれ以前の事として
書いたのだ

四 尾本「あやしと見
たてまつりたまへり」
五 普通でも悲しい別
れのだが、物心もつ
かぬ幼児故一層

六 火葬ゆゑ

はれる、こよひより、と、きこえいそがせば、わりなくおもほしながら、ま
かでさせたまひつ。

御むねのみつとふたがりて、つゆまごろまれず、明かしかねさせたまふ。御
つかひの行きかふほどもなきに、なほいふせさを限りなく宣たまはせつる
を、よな(三)かうちすぐるほどになむ、たえはてたまひぬる、とて泣きさわげば、
御つかひもいとあへなくて歸りまゐりぬ。きこしめす御こゝろまごひ、なに
ごともおぼしめしわかれず、こもりおはします。御子は、かくてもいと御覽せ
まほしけれど、かゝるほどにさぶらひたまふ例なきことなれば、まかでたま
ひなむとす。なににごとかあらむともおもほしたらす、さぶらふ人々の泣きま
ごひ、うへも御涙のひまなく流れおはしますを、あやし(四)と見たてまつりたま
へるを。よろしき事にだに、かゝる別れの悲しからぬはなきわざなるを、ま
してあはれに言ふかひなし。

かぎりあれば、例の作法にをさめたてまつるを、母北の方、おなじけぶりに

一 泣きこがれ、けぶりの縁語

二 愛宕、鳥邊野六波羅とも白川修學院ともいふ

三 母詞。

四 更衣は本統はよい人なのだと作者はことわらずには居られないのである

ものぼりなむと、泣き焦れたまひて、御おくりの女房の車にしたひ乗りたまひて、おたぎといふ所に、いといかめしう其の作法したるに、おはしつきたるこゝち、いかばかりかはありけむ。むなしき御からを見るく、なほおはするものと思ふが、いとかひなければ、灰になりたまはむを見たてまつりて、今はなき人ご、ひたぶるに思ひなりなむと、さかしう宣たまひつれど、車より落ちぬべうまごひたまへば、さは思ひつかしと人々もてわづらひきこゆ。うちより御つかひあり。三位のくらの贈りたまふよし、勅使きてその宣命よむなむ、悲しき事なりける。女御とだに言はせずなりぬるが、あかずくちをしうおぼさるれば、いまひときさみのくらゐをだにと、おくらせたまふなりけり。これにつけても憎みたまふ人々おほかり。ものおもひ知りたまふは、さまかたちなどのめでたかりし事、心ばせのなだらかにめやすく憎みがたかりし事など、今ぞおぼし出づる。さまあしき御もてなしゆゑこそ、すげなうそねみたまひしか、人がらのあはれに情ありし御心を、うへの女房など

一「ある時はありの
すさまに憎かりきなく
てぞ人は戀しかりけ
るし戀、ある時はあり
のすさまに語らばで戀
しきものと別れてぞ知
る—古今六帖

二御悲歎の中に夏は
過ぎ秋になつた野は
も人々の袖にも露は宿
るのである

三弘徽殿の憎しみ—
第一皇子—若宮への推
移に注意

四 何度かの御弔問の
一例

五 靱負は衛門の別
名、弓箭を帶するより
云ふ、命婦は五位以上
の婦人

六 宵に月ありて曉は
闇なる八月十日ごろ

七〔評釋〕つねよりも
思し出づること多き故
に命婦を出し給ひても
猶そのまゝに打眺めて
おはします也

八 なき人は琴を巧み
に奏し、ふとお耳に入
れる歌も

も戀ひしのびあへり。なくてぞとは、かゝるをりにやと見えたり。

はかなく日ごろすぎて、後のわざなどにも、こまかにとぶらはせたまふ。ほ
ごふるまゝに、せむ方なう悲しうおぼさるゝに、御かたぐの御とのゐなど
も絶えてしたまはず、たゞ涙にひちて明かし暮させたまへば、見たてまつる
人さへ、露(三)けき秋なり。なきあどまで人の胸あくまじかりける人の御おぼえ
かな。とぞ、弘徽殿(三)などには、なほゆるしなう宣たまひける。一の宮を見た
てまつらせたまふにも、わかみやの御こひしさのみおもほしいでつゝ、した
しき女房御めのとなどをつかはしつゝ、ありさまをきこしめす。

野分(四)だちて、俄にはださむき夕暮のほど、つねよりもおぼし出づること多く
て、ゆげ(五)ひの命婦といふをつかはす。夕づくよのをかしきほどに出だし立て

させたまひて、やがてながめおはします。かうやうのをりは、御あそびなごせ
させたまひしに、心(六)ことなる物のねをかきならし、はかなくきこえいづる言
の葉も、人よりはことなりしけはひかたちの、おもかげにつと添ひておぼさ

一「ぬばたまの闇のうつつはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり」古今、戀三

二草に風を添へ、闇に月を出してゐる

三「訪ふ人もなき宿なれど來る春は八重葎にもさはらざりけり」新勅撰春上、貫之

四主人側も挨拶できぬ

五母詞

六生き残つたのがつらいといふ詞どほり

七命婦詞

八典侍（内侍所の次人）、今までの御使の一人、この命婦は弔問は初めてである（一三頁参照）

九心を静めてから申し傳へるのである

十、夢ならば醒めるのに、この悲しみは

るゝも、やみのうつつにはなほおとりけり。

命婦かしこにまかでつきて、かぞ引き入るゝより、けはひあはれなり。やも

め住みなれど、人ひとりの御かしづきに、とかくつくるひたてゝ、めやすき

ほごにて過ぐしたまへるを、闇にくれて臥ししづみたまへるほごに、草もた

かくなり、野分にいとゞあれたるこゝちして、月かげばかりぞ、やへむぐら

にもさはらず、さし入りたる。

みんなみおもてにおろして、母君もとみにえものも宣たまはず。今までとま

りはべるがいとうきを、かゝる御つかひの、よもぎふの露わけ入りたまふに

つけても、はづかしうなむ、とて、げにえたふまじく泣いたまふ。まわりて

はいとゞ心ぐるしう、心ぎももつくるやうになむと、内侍のすけの奏したま

ひしを、もの思ひたまへしらぬこゝちにも、げにこそいとしのびがたうはべ

りけれ、とて、やゝためらひて仰せ言つたへきこゆ。

しばしは夢かとのみたごられしを、やう／＼思ひしづまるにしも、さむべき

一 以上仰せ言。父母の喪は、服一年、五十日、更衣は、卒去、今は秋で、五十日は過ぎてゐる

二 「岷江」心づかひおもしろし

三 母詞

四 「細流」天子のみことのを明詔なども云なり

五 勅書。命婦の傳へた仰せ言と矛盾せず重複もしない

六 「玉小櫛」もろともにはぐくまぬがおぼつかなきをの誤か

七 奥州の名所、宮城野と書くから、宮中にとへたのである

方なくたえがたきは、いかにすべきわざにかとも、問ひあはずべき人だになきを、しのびてはまゐりたまひなむや。若宮のいとおぼつかなく露けきなかにすぐしたまふも、心ぐるしうおぼさるゝを、とくまゐりたまへ、^(二)など、はか／＼しうも宣たまはせやらす、むせかへらせたまひつゝ、かつは人も心よわく見たてまつるらむと、おぼしつゝまぬにしもあらぬ御けしきの心ぐるしさに、^(三)うけたまはりもはてぬやうにてなむ、まかではべりぬる、とて、御文たてまつる。目も見えはべらぬに、かくかしこきおほせごを^(四)光りにてなむ、とて、見たまふ。

^(五)ほどへば少しうちまぎるゝこともやと、待ちすぐす月日に添へて、いとしのびがたきは、わりなきわざになむ。いはけなき人もいかにと思ひやりつゝ、^(六)もろともにはぐくまぬおぼつかなきを、今はなほ、むかしのかたみになすらへてものしたまへ、など、こまやかに書かせたまへり。

^(七)みやぎの露ふきむすぶ風のおとにこ萩がもを思ひこそやれ

一 母詞

二 「いかでなほあり
と知らせじ高砂の松の
思はむ事もはづかし」
古今六帖五
三 何度も御使が立つ
たと前にある

四 子に先立たれた不
吉な自分ゆゑ、宮様か
こゝにゐられるの

五 命婦詞。宮様はお
やすみになられてでせ
り、舊注は見たてまつ
りてからを詞とする

六 母詞。人の親の心
は闇にあらねども子を
思ふ道にまどひぬるか
な」後撰雜一、兼輔

とあれど、え見たまひはてず。

(二) 命ながさの、いとつらう思うたまへ知らるゝに、松のおもはんことだにはづ
かしう思ひたまへはべれば、もゝしきに行きかひはべらむことは、ましてい
とはゞかり多くなむ。かしこき仰せ言をたび／＼うけたまはりながら、みづ
からはえなむ思ひたまへ立つまじき。若宮はいかにおもほし知るにか、まゐ
りたまはむ事をのみなむおぼしいそぐめれば、ことわりに悲しう見たてまつ
りはべるなど、うち／＼に思ひたまふるさまを奏したまへ。ゆゝしき身には
べれば、かくておはしますも、いま／＼しうかたじけなく、なご宣たまふ。
(三) 宮はおほのごもりにけり。見たてまつりて、くはしく御ありさまも奏しは
べらまほしきを、まちおはしますすらむを、夜ふけはべりぬべし、とて急ぐ。
(六) くれまごふ心のやみも、たへがたきかたはしをだに、はるくばかりにきこえ
まほしうはべるを、わたくしにも心のどかにまかだたまへ。としごろ、うれ
しくおもだたしきついでにのみ、立ち寄りたまひしものを、かゝる御せうそ

一前に、「今までと
まりはべるがいとつら
う」「命長その……」と
言つたから、返すく
二更衣の出目は二頁
に句はしたが、こゝで
や、詳しく述べる。こ
の長物語に、帝は待ち給
ふのである。

三 横死

四すでに前に命婦
は、夜ふけ待りぬべし
と急いだのだが、母君
を慰め、帝を辯護中さ
ねばならぬ。すぐ歸る
ことはできなくなつた

五 命婦詞

こにて見たてまつる、かへすくつれなき命にもはべるかな。生まれし時よ
り思ふ心ありし人にて、故大納言、いまはとなるまで、たゞ、この人の宮づ
かへのほい必ずとげさせたてまつれ、われなくなりぬとて、くちをしう思ひ
くづほるな、と、かへすくいさめおかればべりしかば、はかしくしううし
ろみ思ふ人なきまじらひは、なかくなるべきことと、思うたまへながら、
ただかの遺言をたがへじとばかりに、出だし立てはべりしを、身にあまるま
での御心ざしの、よろづにかたじけなきに、人げなきはぢをかくしつゝ、ま
じらひたまふめりつるを、人のそねみ深くつもり、やすからぬこと多くなり
そひはべるに、よこざまなるやうにて、つひにかくなりはべりぬれば、かへ
りてはつらくなむ、かしこき御心ざしを思うたまへられはべる。これもわり
なき心のやみに、なんご言ひもやらず、むせかへりたまふほどに、夜もふけぬ。
うへもしかなむ。わが御心ながら、あながちに人目おどろくばかりおぼされ
しも、ながかるまじきなりけりと、今はつらかりける人のちぎりになむ。世

一 尾本「とゞめじと思ひしを」

二 命婦詞。前に、夜もふけぬとあつた

三 以下歸りぎまのこ
と。今晚の景物を總收
する。月はもう山に入
る。おさまつた。戸外に
出た命婦の耳に叢に鳴
く虫の聲が、ふけきつ
た夜の静けさの中に、
泣けとばかりに響くの
である。

四 命婦詞。降る（振
る）、鈴の縁語

五 母返歌

六 侍女に歌と詞を取
り次がす

にいさゝかも人の心をまげたる事はあらし、と思ふを、たゞ此の人ゆるゑにて、
あまたさるまじき人のうらみをおひしはてしは、かううちすてられて、心
をさめむ方なきに、いとゞ人わろうかたくなになりはつるも、さきの世ゆか
しうなむ、と、うちかへしつゝ、御しほたれがちにのみおはします、と語り
てつきせず。泣くく、夜いたうふけぬれば、こよひすぐさず御かへり奏せ
む、と急ぎまゐる。

月(三)は入りがたの空きようすみわたれるに、風いと涼しく吹きて、草むらの虫
のこゑもよほしがほなるも、いとたちはなれにくき草のもとなり。

鈴(四)むしのこゑのかぎりをつくしてもながき夜あかすふる涙かな。えも乗り
やらず。

いとゞしく虫のねしげきあさちふに露おきそふる雲のうへ人。かごともき
こえつべくなむ、と言はせたまふ。(六)

をかしき御おくりものなどあるべきをりにもあらねば、たゞかの御かたみに

一 母の心。一切が愚痴である。理性に従ふことはできないのである。

二 九頁のまゝ、草花を御覽なさるふりて、實は命婦の歸りを待つてみられるのである。

三 伊勢集に長恨歌の屏風歌を、宇多天皇のために詠んだことが見える。

とて、かゝる用もやと残したまへりける御さうぞくひとくだり、御ぐしあげの調度めくもの添へたまふ。

若き人々かなしき事はさらにも言はず、内わたりを朝夕にならひて、いとさうぐしく、うへの御ありさまなど思ひ出できこゆれば、とくまありたまはむことをそゝのかしきこゆれど、かくいまぐしき身の添ひたてまつらむも、いと人ぎゝうかるべし、また、見たてまつらでしばしもあらむはいとうしろめだう思ひきこえたまひて、すがぐともえまゐらせたてまつりたまはぬなりけり。

命婦は、まだおほのごもらせたまはせざりけるを、あはれに見たてまつる。
おまへのつぼ前栽の、いとおもしろきさかりなるを御覽するやうにて、しのびやかに、心にくきかぎりの女房四五人さぶらはせたまひて、御ものがたりせさせたまふなりけり。このごろ、あけくれ御覽する長恨歌の御繪、亭子院のかゝせたまひて、伊勢貫之によませたまへる、やまと言の葉をも、もろこ

一 母文

しのうたをも、たゞそのすぢをぞまくらごと^〇にせさせたまふ。

いとこまやかにありさまを問はせたまふ。あはれなりつる事しのびやかに奏す。御返り御覽すれば、いと^二もかしこきはおき所もはべらず。かゝるおほせごとにつけても、かきくらすみだりごゝちになむ。

あらし風ふせぎしかげの枯れしより小萩がうへぞしづ心なき

などやうにみだり^三がはしきを、心をさめざりけるほどと、御覽じゆるすべし。いとかうしも見えじとおぼししづむれど、さらにえしのびあへさせたまはず。御覽心はじめし年月のことさへかきあつめよろづにおぼしつゞけられて、時のまもおぼつかなかりしを、かく^三ても月日はへにけりと、あさましうおぼしめさる。

故大納言の遺言あやまたず、宮づかへのほい深くものしたりしよろこびは、かひあるさまにとこそ思ひわたりつれ、いふかひなしや、と、うち宣たまはせて、いとあはれにおぼしやる。

二 書き様、歌の様の両説がある。後者は、父帝がいますのに、更衣の死後若宮はしつ心なしといふのは、失禮にあたるといふのである。

三 「細流」身をうしと思ふに消えぬものなればかくてもへぬる世にこそありけれ(古今)と云ふ歌の心なり

四 帝詞

一 帝詞。一旦詞を切られたが思ひ返して、かういはれる。

二 長恨歌「唯將三舊物、表二深情、一鈿合金釵寄將去、一鈿留二股一合、一扇、一鈿擊三黃金、一合分レ鋼」

三 帝歌。長恨歌「臨功道士鴻都客、能以三情誠一致二魂魄、一爲感二君王展轉思、一遂教三力士慙懃求」

四 長恨歌「太液芙蓉未央柳、芙蓉如レ面柳如レ眉、對レ此如何淚不レ垂」

五 長恨歌「在天願作二比翼鳥、一在地願爲二連理枝、一」

六 長恨歌「天長地久有時盡、此恨綿々無二絕期、一」
七 風も虫も帝には御悲歎の種であるが、弘微殿女御は月を賞して音楽會を催される。その音を帝の御悲歎をますのである。ここに弘微殿女御の強い御性格に言及する。

かくても、おのづから、わか宮などおひいでたまはば、さるべきついでもありなむ、命ながくこそ思ひ念せめ、など宣たまはず。

かのおくりもの御覽せさす。なき人のすみかたづねいでたりけむしるしのかんざしならましかば、と、おもほすも、いとかひなし。

たづね行くまぼろしもがなつてにてもたまのありかをそこと知るべく

繪にかける楊貴妃のかたちは、いみじき繪師といへども筆かぎりありければ、いとにほひなし。太液の芙蓉未央の柳も、げにかよひたりしかたちを、

からめいたるよそひは、うるはしうこそありけめ、なつかしうらうたげなりしをおぼしいづるに、はなとりの色にもねにも、よそふべきかたぞなき。あ

さゆふのことぐさに、はねをならべ、えだをかはさむと、ちぎらせたまひしに、かなはざりける命のほどぞ、つきせすうらめしき。

風のおと虫のねにつけて、もののみ悲しうおぼさるゝに、弘微殿には、ひさしううへの御つぼねにもまうのぼりたまはず、月のおもしろきに、夜ふく

るまで、あそびをぞしたまふなる。いとすさまじう、ものし、ときこしめす。

このごろの御けしきを見たてまつるうへ人女房などは、かたはらいたし、と聞きけり。いとおしたち、かごとくしき所ものしたまふ御かたにて、ことに

もあらずおぼしけちて、もてなしたまふなるべし。月もいりぬ。

雲(三)のうへも涙にくる、秋の月いかですむらむあさぢふの宿、おぼしやりつ

ゝ、ともし火をかゝげつくして起きおはします。右近(四)のつかさのどのる申し

の聲きこゆるは、丑になりぬるなるべし。人めをおぼして、よるのおとどに

入らせたまひても、まごろませたまふ事かたし。あしたに起きさせたまふと

ても、あく(五)るも知らずとおぼし出づるにも、なほあさまつりごとは怠らせた

まひぬべかんめり。

ものなごもきこしめさず、あさ(六)がれひの氣色ばかりふれさせたまひて、大床

子の御ものなごは、いとほるかにおぼしめしたれば、はい(七)せんにさぶらふか

ぎりは、心ぐるしき御けしきを見たてまつり歎く。すべて近うさぶらふかぎ

一前に、月は入り方の空とあつた
二帝歌。宿を思しやりつゝと地の文につゞく
三長恨歌「孤燈挑盡未成眠、遅々鐘鼓初長夜」
四奥人「丑一刻、右近衛宿申事、至卯」
五「玉簾あくるも知らでねしものを夢にも見じと思ひかけきや」
六「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
七「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
八「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
九「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
十「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
十一「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
十二「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
十三「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
十四「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
十五「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
十六「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
十七「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
十八「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
十九「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
二十「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
二十一「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
二十二「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
二十三「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
二十四「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
二十五「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
二十六「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
二十七「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
二十八「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
二十九「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
三十「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
三十一「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
三十二「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
三十三「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
三十四「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
三十五「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
三十六「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
三十七「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
三十八「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
三十九「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
四十「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
四十一「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
四十二「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
四十三「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
四十四「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
四十五「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
四十六「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
四十七「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
四十八「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
四十九「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
五十「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
五十一「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
五十二「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
五十三「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
五十四「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
五十五「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
五十六「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
五十七「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
五十八「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
五十九「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
六十「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
六十一「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
六十二「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
六十三「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
六十四「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
六十五「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
六十六「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
六十七「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
六十八「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
六十九「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
七十「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
七十一「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
七十二「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
七十三「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
七十四「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
七十五「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
七十六「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
七十七「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
七十八「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
七十九「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
八十「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
八十一「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
八十二「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
八十三「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
八十四「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
八十五「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
八十六「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
八十七「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
八十八「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
八十九「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
九十「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
九十一「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
九十二「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
九十三「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
九十四「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
九十五「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
九十六「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
九十七「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
九十八「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
九十九「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」
一百「春宵苦短、日高起、從後拾遺雜下、伊勢、此君王不早朝」

りは、をこ女、いどわりなきわざかなと、いひあはせつゝ歎く。さるべき
ちぎりこそはおはしましけめ、そこらの人のそしりうらみをも、はゞからせ
たまはず、この御ことにふれたる事をば、道理をも失はせたまひ、いまはた、
かく世の中のことをも、おぼし捨てたるやうになりゆくは、いとたいぐし
きわざなりと、人のみかごのためしまで引き出で、さゝめき歎きけり。

帚 木

一 言はれるひ消たれ(悪く
流される)光の縁
二 流さむ、輕びたる
の縁

三 交野少將物語の主人
公、風流一途の才子

四 左大臣、光源氏の
舅
五 「春日野の若紫の
摺衣しのぶの亂れ限り
知られず」伊勢物語、
新古今戀一、在原業平

光る源氏、名のみことくしう、いひけたれたまふとが多かんなるに、いと
ゞかゝるすきごごどもを末の世にもきつたへて、かろびたる名をや流さむ
としのびたまひけるかくろへごごをさへ、語りつたへけむ、人のものいひさ
がなさよ。さるは、いといたく世をはゞかり、まめだちたまひけるほどに、
なよびかにをかしきことはなくて、かたの少將には笑はれたまひけむか
し。

まだ中將なごにもものしたまひし時は、うちにのみさぶらひようしたまひて、
おほいこのにはたえくまかんでたまふを、しのぶのみだれやとうたがひき
こゆることもありしかど、さしも、あだめきめなれたるうちつけのすきぐ
しさなどは、このましからぬ御本性にて、まれには、あながちにひきたがへ、
心づくしなることを、御心におぼしとゞむるくせなむあやにくにて、さるま

一 「玉小櫛」上に内に
のみさぶらひようし給
ひてとあるを、此ほど
け御ものいみのさしつ
ゞきていよく長居し
給ふなり、すべていと
ゞといふ詞はみな此意
をもて見るべし

二 兄弟中でも特に

左大臣

中將

宮
帝
右大臣 — 姫

三 源氏も左大臣の姫
をものうくしてゐるこ
とを暗に示す

四 親の左大臣の邸

じき御ふるまひもうちまじりける。

なが雨はれまなきころ、うちの御ものいみさしつゞきて、いどゞながるさぶらひたまふを、おほどのには、おぼつかなくうらめしくおぼしたれど、よろづの御よそひ、なにくれとめづらしきさまに調じ出でたまひつゝ、御むすこのきんだち、たゞこの御とのゐ所の宮づかへをつとめたまふ。

宮ばらの中將は、なかにしたしくなれきこえたまひて、あそびたはぶれをも、人よりは心やすくなれしくふるまひたり。右のおとゞのいたはりかしづきたまふすみかは、この君もいとも(三)のうくして、すぎがましきあだ人なり。(四)さどにても、我がかたのしつらひまばゆくして、君の出で入りしたまふに、うちつれきこえたまひつゝ、よるひる、學問をもあそびをももろともにして、をさくたちおくれず、いづくにてもまつはれきこえたまふほどに、おのづからかしこまりもおかず、心のうちに思ふことをもかくしあへずなむ、むつれきこえたまひける。

- 一 梅雨の一日、朝から降りつゞいて、宵になつてもやまない
- 二 源氏が宮中でいたゞいてゐる御殿
- 三 大殿油、燈臺
- 四 書籍
- 五 厨子棚、挿繪參照
- 六 艶書
- 七 源氏詞〔細流〕其中に見苦しきも有べきと也、下の心は興あるふみをば隠し給ふ也
- 八 中將詞

- 九 源氏にとつては二流品のどうでもよいものなのであらう。やむなく見せた
- 一〇 中將詞
- 一一 中將詞

つれづれと降りくらしして、しめやかなるよひの雨に、殿上にもをさく人すくなに、御どのゐ所も、れいよりはのごやかなるこちするに、おほとなぶら近くて、ふみどもなど見たまふついでに、近き御厨子なる色々の紙なる文どもをひきいでて、中將わりなくゆかしがれば、「さりぬべき少しは見せむ。かたはなるべきもこそ」と許したまはねば、「そのうちとけてかたはらいたしとおぼされむこそゆかしけれ。おしなべたるおほかたのは、數ならねど、ほゞづにつけて、書きかはしつゝも見はべりなむ。おのがじし怨めしきをりく、待ちがほならむ夕暮などのこそ、見所はあらめ」と怨ずれば、やむごとなくせちにかくしたまふべきなどは、かやうにおほぞうなる御厨子なごに、うち置き散らしたまふべくもあらず、深くとり隠したまふべかンめれば、これは二のまぢの心やすきなるべし。

片端づゝ見るに、「かくさまぐなるものごもこそはべりけれ」とて、心あてに、「それかかれか」など問ふなかに、いひあつるもあり、もてはなれたる

一 中將の要請に、やむを得ず見せはした。中將のさそひには、乗らずまづ實物を隠し、逆襲に轉じた

二 源氏詞
三 中將詞、源氏の逆襲をそらす

四 中將詞

五 「評釋」をりふじにつけたるふみのいらへ歌のかへしなどを心得する也うちは發語
六 身分を思へば、まあくかなりなのも

七 女の通弊

八 「玉小櫛」年わかて行さき多く長きをいふ。わかき人をよこもれるといふも同じ。さてこもれるといひて窓の内とつゞけいふは、おのづからの文のはひ也

事をも思ひよせて疑ふもをかし、とおぼせど、^(二)こそ少なにて、とかくまぎらはしつゝ、とり隠したまひつ。^(三)「そこにこそ多くつごへたまふらめ。少し見ばや。さてなむ、この厨子も心よく開くべき」と宣たまへば、^(三)「御覽じ所あらむこそかたくはべらめ」など、きこえたまふついでに、

「をんなの、これはしもと難つくまじきは、かたくもあるかなど、やうくなむ見たまへ知る。たゞうはべばかりの情に、て走り書き、^(五)をりふしのいらへ、心えてうちし、なんざばかりは、^(六)随分によろしきも多かり、と見たまふれど、そもまことにその方をとり出でむ選びに必ずもるまじきは、いとかたしや。我が^(七)心えたる事ばかりを、おのがじゝ心をやりて、人をばおとしめ、なご、かたはらいたきこと多かり。親など立ち添ひもてあがめて、^(八)おひさきこもれる窓のうちなるほどは、たゞかたかごを聞き傳へて、心を動かす事もあなめり。かたちをかしく、うちおほごき、若やかにて、まぎるゝ事なきほど、はかなきすさびをも、人まねに心をいるゝ事もあるに、おのづから、一つゆ

一 仲人口

二 中將の歎息するさまに、源氏は負けたと思ふ

三 源氏詞
四 中將詞

五 源氏詞
六 尾本「いづれを上
の品におきてか、三つ
に分くべき」

ゑづけて、しいづる事もあり。見る人、おくれたる方をば言ひかくし、さてありぬべき方をば、つくろひてまねび出だすに、それしかあらじ、と、そらに、いかゞは、おしはかり思ひくたさむ。まことかど見もて行くに、見劣りせぬやうは無くなむあるべき」と、うめきたる氣色もはづかしげなれば、いとなべてはあらねど、我もおぼしあはする事やあらむ、うちほゝゑみて、「^(三)そのかたかどもなき人はあらむや」と宣たまへば、「いとさばかりならむあたりには、誰かはすかされ寄りはべらむ。とる方なく口惜しききはと、優なりとおぼゆばかりすぐれたるとは、數ひとしくこそはべらめ。人の品たかく生まれぬれば、人にもてかしづかれて、かくるゝ事も多く、じねんに、そのけはひこよなかるべし。中の品になむ、人の心々、おのがじしの立てたるおもむきも見えて、わかるべき事、かたぐゝ多かるべき。しものきざみといふきはになれば、ことに耳たゝすかし」とて、いどくまなげなる氣色なるもゆかしくて、「^(五)その品々やいかに。いづれをみつの品におきてか分くべき。本

一 源氏の質問に中將は即答できない。實はこの三品説は左馬頭の説で中將も詳しくはまだ聞いてゐなかつたのである。

二 左馬寮の長官。從五位上相當、式部省の三等官（六位相當）、なほ近衛府の中將は從四位上相當

三 馬頭詞

四 國守、地方長官
五 地方政治を掌る、〔評釋〕受領をいやしめたる書ざま也
六 地方長官は財を蓄へる、身分は低くとも財力の物言ふ時勢である

の品たかく生まれながら、身はしづみ、位みじかくて人げなき、また、なほ人のかんだちめなごまでなりのぼりたる、われはがほにて家のうちを飾り、人に劣らし、と思へる、そのけぢめをばいかゞ分くべき」と問ひたまふほどに、左の馬の頭、藤式部の丞、御ものいみにこもらむとて參れり。世のすきものにて、ものよくいひとほれるを、中將まちどりて、そのしなぐをわきまへさだめあらそふ。いと聞きにくき事おほかり。

「三なりのぼれども、もとよりさるべきすぢならぬは、世の人の思へる事も、さはいへど、なほことなり。また、もとはやむごとなきすぢなれど、世にふるたづき少く、ときよ移ろひて、おぼえ衰へぬれば、心は心として、事たらず、わろびたる事ども出て來るわざなめれば、とりぐにことわりて、中の品にぞ置くべき。

すりやう受領といひて、ひとの國の事にかゝづらひ營みて、品さだまりたる中にも、四又きざみありて、中六の品のけしうはあらぬ、えり出づべきころほひなり。

一 〔評釋〕御千うみ奉る類をいふ

二 源氏詞

三 中將詞

四 馬頭詞

なま／＼のかんだちめよりも、非參議の四位どもの、世のおぼえ口惜しからず、本のねざし賤しからぬが、安らかに身をもてなしふるまひたる、いとかはらかなりや。いへの内に、たらぬ事など、はた無かんめるまゝに、はぶかず、まばゆきまでもてかしづける娘などの、おとしめがたくおひいづるも、あまたあるべし。宮づかへに出で立ちて、思ひかけぬさいはひ取り出づるためしごも多かりかし」など言へば、「すべてにぎはゞしきに依るべきななり」とて笑ひたまふを、「こと人の言はむやうに、心えず仰せらるゝ」とて、中將にくむ。

「本の品、ときよのおぼえうちあひ、やむごとなきあたりの、うち／＼のもてなしけはひおくれたらむは、さらにも言はず、何をしてかくおひ出でけむ、と、いふかひなくおぼゆべし。うちあひて勝れたらむもことわり、これこそはさるべきこと、とおぼえて、めづらかなることとも、心も驚くまじ。なにがしが及ぶべきほどならねば、上が上はうちおきはべりぬ。

一 先づ上の上は簡單にかたづけ、次に下の品を云ふ

二 語とちられ、門の縁

三 意外といふ點が

四 「玉小櫛」捨てがたきものをやの誤

五 三品説に式部は關知しない。この説を述べるのは馬頭であることがわかる。

六 女になりて、女にしての兩解がある。こゝは後者

さて世にありと人に知られず、淋しくあばれたらむむぐらの門かどに、思ひのほかにらうたげならむ人の、(二)とぢられたらむこそ、かぎりなくめづらしくはおぼえめ。いかではたかゝりけむと、思ふ(三)よりたがへる事なむ、あやしく心とまゐるわざなンべき。父の年おい、ものむつかしげにふとりすぎ、せうとの顔にくげに、思ひやり殊なることなき聞の内に、いといたく思ひあがり、はかなくしいでたることわざも、ゆるなからず見えたらむ、かたかごにても、いかゞ思ひのほかにをかしからざらむ。すぐれて疵なき方の選びにこそ及ばざらめ、さるかたにて捨てがたきものを(四)をば」とて、式部を見やれば、わが妹どもの、よろしききこえあるを思ひて宣たまふにや、とや心うらむ、ものも言は(五)ず。いでや、上の品と思ふにだに、かたげなる世を、と、君はおぼすべし。白き御ぞごものなよゝかなるに、直衣ばかりをしごけなく着なしたまひて、紐などもうちすてて、そひ臥したまへる御ほかげ、いとゞめでたく、女(六)にて見たてまつらまほし。この御ためには、上が上をえり出でて、なほあくま

一 馬頭詞。良妻得が
たきを論ず

二 柱石の臣
眞の大器

三 聖徳太子憲法「上
行下靡」

四 家庭の主婦は一人
せねばならないこと
で、多くの要件を兼備
すべきに對してせべき家
と云つた

五 「そゝにととす
ればかゝりかくすれば
あないひしらすあふさ
きるざに」古今集併諸
七 我慢できる程度の試
験してみよとの遊戯
心からではなく、信頼
できる妻とする以上
は、立派に出来上つた
女も居ようかと思つた
ば、試験を始めてみれ
ば、みな厭厭があつて、
一人を定められない。
この論の冒頭(コノ真)
の言を展開したのであ
る

じく見えたまふ。

さま／＼の人のうへごもを語りあはせつゝ、大方(ニ)の世につけて見るにはどが
無きも、わがものとうちたのむべきを選ばむに、多かる中にも、えなむ思ひ
さだむまじかりける。

をのこの、おほやけに仕うまつり、はか／＼しき世(三)のかためなるべきも、ま
ことのうつはものとなるべきを、とり出ださむには難かるべしかし。されど、
賢しども、一人二人世の中をまつりごちしるべきならねば、かみはしもに
助けられ、下(四)は上になびきて、こと廣きに譲らふらむ。

せ(五)ばき家の内のあるじとすべき人ひとりを思ひめぐらすに、足らはであしか
るべき大事(七)どもなむ、かた／＼多かる。とあればかゝり、あふさきるさにて、
なのためにさてもありぬべき人の少きを、すき／＼しき心のすさびにて、人の
ありさまをあまた見あはせむのこのみならねど、ひとへに思ひさだむべきよ
るべとすばかりに、同じくは我が力入りをし、なほしひきつくろふべき所な

一 「心にくくおしは
つからるゝなり」とは言
つても
二 君達、貴公子、光
源氏と中將を指す
三 縛られるほどの身
分でない私さへ、適當
な女が見つかりませ
ん、ましてあなた方は
四 十分文句を推敲し
ながら表面にはその苦
心を見せぬ

五 息よりも細い聲
六 以上の諸技巧で、
女は缺點をかくすもの

く、心になふやうもやと、えりそめつる人の、さだまりがたきなるべし。
必ずしもわが思ふにかなはねど、見そめつる契りばかりを捨てがたく思ひと
まる人は、ものまめやかなりと見え、さてたもたるゝ女のためも、心にくく
おしはからるゝなり。

(二) されどなにか、世のありさまを見たまへあつむるまゝに、心に及ばず、いと
ゆかしき事もなしや。(三) きんだちの上なき御えらびには、ましていかばかりの
人かはたぐひたまはむ。(四) 所せく思うたまへぬだに。

かたちきたなげなく若やかなるほどの、おのがじしは塵もつかじと身をもて
なし、文を書けど、おほごかにことえりをし、墨つきほのかに、心もとなく
思はせつゝ、またさやかにも見てしがなど、すべなく待たせ、わづかなる聲
きくばかり言ひ寄れど、息の下にひきいれ、ことずくななるが、いとよくも
てかくすなりけり。なよびかに女しと見れば、あまり情にひきこめられて、
とりなせば、あだめく。これをはじめの難とすべし。

一 夫の世話といふ點から見れば

二 耽美主義派

三 實用主義派

四 男が出退勤に際し

五 他人に話す筈はなく、理解あるなら妻君に相談したいものと

六 わけもない公憤
七 自分一人では決定しかねること
八 さて、自分の妻君は、いつてもわからぬ奴と思へば

九 柔順第一

ことが中になのめなるまじき人のうしろみの方は、もののはれ知りすぐし、はかなきついでのなさけあり、をかしきにすゝめる方、なくてもよかるべしと見えたるに、

また、まめ／＼しきすぢをたてて、耳はさみがちに、美相びさうなきいへとうじの、ひとへにうちとけたるうしろみばかりをして、朝夕の出で入りにつけても、おほやけわたくしの人のたゝすまひ、よきあしき事の、目にも耳にもとまるありさまを、うとき人に、わざとうちまねばむやは、近くてみむ人の聞きわき思ひ知るべからむに、語りもあはせばや、と、うちも忍まれ、涙もさしくみ、もしは、あやなきおほやけ腹だたく、心一つに思ひあまる事など多かるを、何にかは聞かせむ、と思へば、うちそむかれて、人しれぬ思ひ出で笑ひもせられ、あはれ、とも、うちひとりごたるゝに、なに事ぞ、などはつかにさし仰ぎ居たらむは、いかゞは口惜しからぬ。

たゞひたぶるに子めきて、やはらかならむ人を、とかくひきつくるひては、

一 その缺點

二 同權主義賢夫人

三 馬頭詞。試験科目
減少、温順一科目とな
る

なごか見ざらむ。心もとなくとも、なほし所あるこゝちすべし。げに、さしむかひて見むほどは、さてもらうたき方に罪ゆるしみるべきを、^(二)たちはなれは、さるべき事をも言ひやり、をりふしにしいでむわざの、あだごともまめごとも、わが心と思ひうる事なく、深きいたりなからむは、いと口惜しく、たのもしげなきとがや、なほ苦しからむ。常は少しそばくしく心づきなき人の、をりふしにつけていではえするやうもありかし」など、くまなきものいひも、さだめかねて、いたくうちなげく。

「^(三)今はたゞ品にもよらじ。かたちをばさらにも言はじ。いと口惜しく、ねぢけがましきおぼえだになくば、たゞひとへに、ものまめやかに静かなる心のおもむきならむよるべをぞ、つひの頼み所には思ひおくべかりける。あまりのゆゑよし、心ばへ、うちそへたらむをば、喜びに思ひ、少しをくれたる方あらむをも、あながちに求め加へじ。うしろやすく、のどけき所だに強くば、うはへの情は、おのづからもてつけつべきわざをや。

派一 のどけからぬ行動

二 用意周到

三 女が心から嫌ひは
てたでもない對手の男
四 長く居る上役の女
中、老女

艶に物はぢして、恨み言ふべきことをも、見知らぬさまにしのびて、うへは
つれなくみさをづくり、心ひとつに思ひあまる時は、いはむ方なくすぎき言
の葉、あはれなる歌をよみおき、しのばるべきかたみをとどめて、深き山里、
世ばなれたる海づらなどに、這ひ隠れぬかし。わらはにはべりし時、女房な
ごの物語よみしを聞きて、いとあはれに悲しく、心ふかきことかな、と、涙
をさへなむ落しはべりし。今思ふには、いとかるくしく、ことさらびたる
事なり。心ざし深からむ男をおきて、見る目の前につらき事ありとも、人の
心を見知らぬやうに逃げ隠れて、人をまごはし、心をも見むとするほどに、な
がき世のものおもひになる、いとあぢきなき事なり。心ぶかしやなど褒めた
てられて、あはれすゝみぬれば、やがて尼になりぬかし。思ひたつほどは、
いと心すめるやうにて、世にかへり見すべくも思へらず。『いであな悲し。か
くはたおぼしなりにけるよ』などやうに、あひ知れる人きとぶらひ、ひたす
らにうしども思ひはなれぬ男、聞きつけて、涙おとせば、使ふ人ふるごたち

一 そぎ尼の態

二 惡趣。地獄・餓鬼・畜生・修羅。
三 蜻蛉日記の作者を家出事件以後、愛人兼家は雨蛙(尼歸る)と呼んだといふ。

四 男が一寸氣をちらしたとて、おほげさの沙汰にしてしまはぬとも限らぬ。

など、『君の御心はあはれなりけるものを。あたら御身を』など言ふに、みづから額髪をかきさぐりて、あへなく心ぼそければ、うちひそみぬかし。しのぶれど涙こぼれそめぬれば、をり／＼ごとにえ念じえず。くやしき事も多かンめるに、ほどけもなか／＼心ぎたなしと見たまひつべし。濁りにしめるほどよりも、なまうかびにては、かへりてあしき道にもたゞよひぬべくぞおぼゆる。たえぬすくせ淺からで、尼にもなさで尋ね取りたらむも、やがてその思ひ出で、うらめしきふしあらざらむや。

あしくもよくも相添ひて、とあらむをりもかゝらむきざみをも、見すぐしたらむ中こそ、契り深くあはれならめ。我も人も、うしろめたく心おかれじやは。

また、^(四)なのめに移ろふ方あらむ人を恨みて、氣色ばみそむかむ、はたをこがましかりなむ。心は移ろふかたありとも、見初めし心ざしいとほしく思はば、さる方のよすがに思ひてもありぬべきに、さやうならむたじろきに、絶えぬ

へきわざなり。

すべて、よろづの事なだらかに、怨すべき事をば、見知れるさまにほのめかし、うらむべからむふしをも、憎からずかすめなさば、それにつけて、あはれもまさりぬべし。多くは、わが心も、みる人から治まりもすべし。あまりむげにうちゆるべ、見放ちたるも、心安くうたきやうなれど、おのづから(三)かろき方にぞおぼえはべるかし。つな(三)がぬ舟の浮きたるためしもげにあやなし。さははべらぬか」と言へば、中將うなづく。

「さ(四)しあたりて、をかしともあはれとも、心にいらむ人の、たのもしげなき疑ひあらむこそ、大事なるべけれ。わが心あやまち無くて見すぐさば、さしなほしてもなごか見ざらむ、とおぼえたれど、それさしもあらじ。ともかくも、たがふべきふしあらむを、のどやかに見しのばむよりほかに、ます事あるまじかりけり」と言ひて、わが妹の姫君は、このさだめにかなひたまへり、と思へば、君(五)のうちねぶりて、ことばませたまはぬを、さうぐしく、

一 男の心は、女の出
方次第

二 どうでもよい女といふ氣になる
三 「泛乎若不繫之舟」文選、鵬鳥賦

四 中將詞

五 源氏は聞かぬふり
引取りである

一 博識の司會者

二 馬頭詞

三 指物師

四 宮中、式乾門内の東脇、御書所の南にあつた(西宮記)

五 彩色畫(つくりゑ)の下繪

六 猛獸

七 (河海抄)韓子曰、有客爲齊王畫者、問之、對曰、狗馬最難、鬼魅最易、狗馬人所不知也、且嘗於前不類之故、鬼魅無形者、可類改易、文選云、畫狗馬一難、或好、或惡、(三都賦注)(細流)後漢書張衡傳云、畫工惡圖三犬馬、而好作鬼魅、誠以實事難形、而虛僞不窮也

心やまし、と思ふ。

馬のかみ、ものさだめのはかせになりて、ひゞらき居たり。中將は、このこ

とわり聞きはてむと、心に入れてあへしらひ居たまへり。

「よろづの事によそへておぼせ、木の道のたくみの、よろづの物を心にまか

せて造り出だすも、臨時のもてあそびものの、その物とあとも定まらぬは、そ

ばつきざればみたるも、げにかうもしつべかりけりと、時につけつゝさまを

變へて、今めかしきに、目うつりてをかしきもあり。大事として、まことに

うるはしき人の調度の飾りとする、定まれるやうあるものを、難なくし出づ

る事なむ、なほまことの物の上手は、さまことに見え分ればべる。

また、(四)ゑ所に上手おほかれど、墨がきに選ばれて、つぎ(五)に、さらに劣り

勝るけぢめ、ふとしも見え分れず。かゝれど、人の見およばぬ蓬萊の山、あ

ら海のいかれるいをの姿、から國のはげしきけたものの形、目に見えぬ鬼の

顔などの、おごろくしく作りたるものは、心にまかせて、ひときは人の目

を驚かして、じちには似ざらめど、さてありぬべし。世の常の山のたゞすまひ、水の流れ、目に近き人の家居ありさま、げにと見え、なつかしくやはらいだるかたなどを、静かにかきませて、すくよかならぬ山の氣色、木ぶかく世ばなれて疊み成し、けちかきまがきの内をば、その心しらひおきてなごをなむ、上手はいと勢ことに、わる者は及ばぬ所おほかんめる。

てを書きたるにも、深きことはなくて、こゝかしこの、點ながに走り書き、そこはかどなく氣色ばめるは、うち見るにかどくしく、氣色だちたれど、なほ、まことのすぢをこまやかに書きえたるは、うはべの筆きえて見ゆれど、今ひとたび取り並べて見れば、なほじちになむよりける。

はかなき事だにかくこそはべれ。まして人の心の、時にあたりて氣色ばめらむ見る目のなさけをば、え頼むまじく思うたまへはべる。そのはじめの事、(二)すきくしくとも申しはべらむ」とて、近く居よれば、君も目さましたま

ふ。中將いみじく信じて、つらづゑをつきてむかひ居たまへり。のりの師の、

一 説教所。この品定の構成は法華經の三周の説に依ると花鳥餘情はいふ・法説一周、方便品、(三四頁まで) 説一周、譬喩品、(三六頁まで) 因縁説一周、化城喩品、(三七頁以下)である

二 馬頭詞。丁寧語はべりが急にふえてゐるのは、源氏が目をさましたからであらう

三 (細流)前に美相なき家とうじといひし事也

四 一生つれそふ本妻

五 嫉妬

六 うるさくて、自然に心をさめらるゝにつづく

世のことわり説き聞かせむ所のこゝちするも、かつはをかしけれど、かゝる
 ついでは、おのゝむつごとも、えしのびとゞめずなむありける。

「はやう、まだいと下臈にはべりし時、あはれと思ふ人はべりき。きこえさせつるやうに、かたちなどいとまほにもはべらざりしかば、若きほどのすき
 ぐゝちには、この人をとまりにとも思ひとゞめはべらず。寄るべとは思ひながら、さうぐしくして、とかくまぎれありきはンべりしを、もの怨じをいた
 くしはべりしかば、心づきなう、いとかゝらでおいらかならましかば、と思ひつゝ、あまりいとゆるしなく疑ひはべりしもうるさくて、かく數ならぬ身
 を見も放たで、なごかくしも思ふらむと、心ぐるしきをりゝもはべりて、
 じねんに心をさめらるゝやうになむはべりし。

この女のあるやう、もとより思ひいたらざりける事にも、いかで此の人のためには、と、無き手を出だし、おくれたるすぢの心をも、なほ口惜しくは見えじ、と思ひ勵みつゝ、とにかくにつけて、ものまめやかにうしろみ、つゆ

が一 もとは勝氣だつた

二 しょつちうたしな
んで

にても心にたがふ事は無くもがな、と思へりしほどに、すゝめる方と思ひしかど、とかくになびき來て、なよび行き、みにくきかたちをも、この人に見やうとまれむと、わりなく思ひつくろひ、うとき人に見えは、おもてぶせにや思はむと、はゞかり恥ぢて、みさ(三)をにもてつけて、みなるまゝに、心もけしうはあらずはべりしかど、たゞ此の憎き方ひとつなむ、心をさめずはべりし。

そのかみ思ひはべりしやう、かうあながちに、従ひおぢたる人なンめり、いかで、こるばかりのわざして、おどして、この方も少しよろしくもなり、さかなさもやめむ、と思ひて、まことに憂しなども思ひて絶えぬべき氣色ならば、かばかり我に従ふ心ならば、思ひこりなむ、と思ひたまへて、ことさらに情なくつれなきさまを見せて、れいの腹だち怨ずるに、『かくおぞましくば、いみじき契り深くとも、絶えてまた見じ。限りと思はば、かくわりなき物疑ひはせよ。行くさき長くみえむと思はば、つらき事ありとも念じて、な

のめに思ひなりて、かゝる心だに失せなば、いとあはれとなむ思ふべき。人
なみ／＼にもなり、少しおとなびむにそへて、また並ぶ人なくあるべき』な
ど、かしこく教へたつるかなと思ひたまへて、われだけく言ひそしはべるに、
少しうち笑ひて、『よろづに見だてなく、物げなきほどを見すぐして、人かす
なる世もやと待つかたは、いとのごかに思ひなされて、心やましくもあらず。
つらき心をしのびて、思ひなほらむをりを見つけむと、年月をかさねむあい
なだのみは、いと苦しくなむあるべければ、かたみにそむきぬべききざみに
なむある』と、ねたげに言ふ時に、腹だゝしくなりて、憎げなることどもを
言ひはげましはべるに、女も、えをさめぬすぢにて、および一つをひきよせ
てくひてはべりしを、おどろ／＼しくかこちて、『かゝる疵さへつきぬれば、
いよく交らひをすべきにもあらず。はづかしめたまふめるつかさくらゐ、
いとゞしく、何につけてかは人めかむ。世をそむきぬべき身なめり。』なん
ど言ひおどして、『さらば今日こそ限りな二めれ』と、此のおよびをかゞめ

一「手を折りてあひ
みし事を數ふればとを
といひつゝ、四つはへに
けり」紀有常、伊勢物
語

二賀茂臨時祭は十一
月の下の酉の日、その
換習が午の日ある

三 外泊、家路の縁

四この雪を肩して來
たのだから
五籠。香を衣にたき
こめるに使ふ。こゝは
暖めるのか
六 几帳や壁代の帷

てまかでぬ。

『手^(二)を折りてあひみしことをかぞふればこれ一つやは君がうきふし。え恨み
じ』など言ひはべれば、さすがにうち泣きて、

『うきふしを心一つに數へ來てこや君が手をわかるべきをり』など、言ひし
ろひはべりしかど、まことには變るべき事とも思うたまへずながら、日ごろ
ふるまでせうそこも遣はさず、あくがれまかりありくに、「臨時^(三)の祭の調樂
に、夜ふけて、いみじうみぞれ降る夜、これかれまかりあかるゝ所にて、思
ひめぐらせば、なほ家ちと思はむ方は、また無かりけり。うちわたりの旅寢^(三)
もすさまじかるべく、氣色ばめるあたりは、そゞろ寒くや、と^(四)思うたまへ
られしかば、いかゞ思へると氣色も見がてら、雪を打ち拂ひつゝまかんでて、
なま^(五)人わろく、爪くはるれど、さりとも、こよひ日^(四)ごろの恨みは解けなむ、
と^(五)思うたまへしに、火ほのかに壁にそむけ、なえたるきぬごものあつごえた
る、大いなるこ^(六)にうちかけて、ひきあぐべき物のかたびらなごうちあげて、

一 正身、本人

こよひばかりやと待ちけるさまなり。さればよと心おごりするに、さうじみ
はなし。さるべき女房どもばかりとまりて、『親の家に此のよさりなむ渡りぬ
る』と答へはべり。

二 いはむ方なくすこ
き言の葉あはれなる歌
をよみおき(三二頁)

三〔河海〕直隠

艶三なる歌もよまず、氣色はめるせうそこもせで、いとひた三やごもりに情なか
りしかば、あへなきこゝちして、さがなく許しなかりしも、我をうとみねと
思ふ方の心やありけむ、と、さしも見たまへざりし事なれど、心やましきま
ゝに思ひはべりしに、着るべきもの、常よりも心とゞめたる色あひしさま、
いとあらまほしくて、さすがに、わが見捨ててむのちをさへなむ、思ひやり
うしろみたりし。

さりとも、たえて思ひ放つやうはあらじ、と思うたまへて、とかく言ひはべ
りしを、そむきもせず、たづねまごはさむとも、隠れしのびず、かゞやかし
からずいらへつゝ、『たゞありし心ながらは、えなむ見すぐすまじき。改め
てのどかに思ひならばなむ、あひみるべき』など言ひしを、さりともえ思ひ

四 前の親の家に
行つてあたといふの
も馬の頭を避けて
の事ではないこと
がわかる

離れじ、と思ひたまへしかば、しばしこらさむの心にて、しか改めむ、とも
言はず、いたく綱びきて見せしあひだに、いといたく思ひ歎きて、はかなく
なりはべりにしかば、たはぶれにくくなむ、おぼえはべりし。

一 龍田山は、紅葉の
名所ゆゑ染色の神とし
た
二 棚機ゆゑ裁縫の神
とした
三 後撰「あふことは
たなばたつめにひとし
くてたちぬふかたはあ
えずぞありける」
四 馬の頭の詞どほり
その女以上のものはあ
るまい。如く(敷く)、
錦の縁語、錦は龍田姫
の縁語
五 花紅葉、龍田の縁
語
六 露、花紅葉の縁語

七 馬頭詞

ひとへにうち頼みたらむ方は、さばかりにてありぬべくなむ思うたまへ出で
らるゝ。はかなきあだごとをも、まことの大事をも、言ひ合せたるにかひな
からず、たつた^(二)びめと言はむにもつきなからず、たなばた^(三)の手にも劣るまじ
く、その方も具して、うるさくなむはべりし」とて、いとあはれ、と思ひ出
でたり。中將「^(三)そのたなばかの裁ち縫ふ方をのごめて、ながき契りにぞあえ
まし。げに、その龍田姫の錦には、またしくものあらじ。^(四)はかなき花^(五)もみぢ
といふも、をりふしの色あひつきなく、はかしくしからぬは、露^(六)のはえなく
消えぬるわざなり、さるにより、難き世ぞとは、定めかねたるぞや」と、言
ひはやしたまふ。

さてまた同じころ、まかり通ひし所は、人もたちまさり、心ばせ、まことに^(七)

一 歌や文を見、琴を
聞くに、わるくないと
思つてゐた
二 指喰ひ女

三 馬の頭に縁故ある
人。父かとの説もある
が、物語には明記して
みない

四 大納言邸への途中

ゆゑありと見えぬべく、うちよみ、走り書き、かい弾く爪音、手つき口つき、
皆たゞしからず、見聞きわたりはべりき。見る目も、こどもなくはべり
しかば、このさがな者をうちとけたる方にて、時々かくろへ見はべりしほど
は、こよなく心どまりはべりき。この人うせてのち、いかゞはせむ、あはれ
ながらも過ぎぬるはかひなくて、しばしばかりなるまゝに、少しまばゆ
く、艶に好ましきことは、目に着かぬ所あるに、うち頼むべくも見えず。か
れれにのみ見せはべるほどに、しのびて心かはせる人ぞ、ありけらし。
かなな月のころほひ、月おもしろかりし夜、うちよりまかではべるに、或う
へ人きあひて、この車に合乗りてはべれば、大納言(三)の家にかかりとまらむと
するに、この人の言ふやう、「こよひ人まつらむやどなむ、あやし(四)く心苦し
き」とて、この女の家、はたよぎぬ道なりければ、荒れたるくづれより、池
の水、影みえて、月だに宿るすみかを、すぎむもさすがにて、降りはべりぬ
かし。もとよりさる心をかはせるにやありけむ、この男いたくすゞろぎて、

一ぬれ椽

二 催馬樂飛鳥井「飛鳥井に、あすかみ、宿りはすべし、おけ、影もよし、みもひも寒し、みまくさもよし」
 三 わごん、六絃
 四 口をゆがめて言ふ馬の頭の姿を思ふべきである

五 「細流」飛鳥井も律の歌也、律は秋を司る也、又律は陰なれば女のかた也、時節かみな月なればをりにあへるなるべし
 六 古今秋下「秋は來ぬ紅葉は庭に散り敷きぬ道踏み分けて訪ふ人もなし」
 七 尾本「菊もえならぬ」

八 さうのこと、十三絃
 九 ばんじきでう

門近き廊のすのこだつものに尻かけて、とばかり月を見る。菊いとおもしろくうつろひわたりて、風にきはへる紅葉の亂れなど、あはれと、げに、見えたり。懷なりける笛取り出でて吹き鳴らし、影もよし、など、つゞしり謠ふほごに、よく鳴る和琴を調べど、のへたりけるを、うるはしく搔き合せたりしほご、けしうはあらずかし。律の調べは、女のものやはらかにかきならしめて、すの内より聞えたるも、今めきたる物の聲なれば、清く澄める月に、をりつきなからず。をそこいたくめでて、すのもとに歩み來て、『庭の紅葉こそふみわけたる跡も無けれ』などねたます。菊を折りて『琴のねも月もえならぬ宿ながらつれなき人をひきやとめける、わろかめり』、など言ひて、『いまひと聲。聞きはやすべき人のある時に、手な残いたまひそ』など、いたくあざれかゝれば、女、いたう聲つくろひて、『木枯らしに吹きあはすめる笛のねをひきとゞむべき言の葉ぞなき』と、なまめきかはすに、憎くなるをも知らで、また箏の琴を盤渉調に調べて、今め

かしく搔い弾きたる爪音、かごなきにはあらねど、まばゆきこゝちなむしは
べりし。

たゞ時々うち語らふ宮仕へ人などの、あくまでざればみすきたるは、さても
見るかぎりは、をかしくもありぬべし。時々にも、さる所にて忘れぬよす
がと思ふたまへむには、頼もしげなく、さしすぐいたり、と心おかれて、そ
の夜の事にことつけてこそ、まかり絶えにしか。

一 古今秋上「折りて
見ば落ちぞしぬべき秋
萩の枝もとををに置け
る白露」

二 馬の頭は源氏より
七歳年長か

この二つの事を思うたまへあはするに、若き時の心にだに、なほさやうにも
て出でたる事は、いとあやしく頼もしげなくおぼえはべりき。今よりのちは、
ましてさのみなむ思うたまへらるべき。御心のまゝに、折らば落ちぬべき萩
の露、拾はば消えなむと見ゆる玉笹の上の霰などの、艶にあえかなるすき
くしさのみこそ、をかしくおぼさるらめ。今、さりとも、な三とせあまり
のほどにおぼし知りはべりなむ。なにがしが賤しきいさめにて、すきたわめ
らむ女には心おかせたまへ。あやまちして、見む人のかたくななる名をも立

一 源氏詞

てつべきものなり」と、いましむ。中將、例の、うなづく。君すこしかたゑみて、さる事とはおぼすべかめり。「いづ方につけても、人わろく、はしたなかりける御物語りかな」とて、うち笑ひおはさうす。

中將、「なにがしは、しれ者の物語りをせむ」とて、「いとしのびて見そめたりし人の、さても見つべかりしけはひなりしかば、ながらふべきものごしも思うたまへざりしかど、なれ行くまゝにあはれとおぼえしかば、たえぐ、忘れぬ者に思うたまへしを、さばかりになれば、うち頼める氣色も見えき。頼むにつけては、うらめしと思ふ事もあらむと、心ながらおぼゆるをりくもはべりしを、見知らぬやうにて、久しきとだえをも、かうたまさかなる人とも思ひたらず、たゞあさゆふにもてつけたらむありさまに見えて、心ぐるしかりしかば、頼めわたる事などもありきかし。親もなく、いと心ぼそげにて、さらば此の人こそは、と、事にふれて思へるさまも、らうたげなりき。

二 浮氣者と自認せざるを得ぬのである

三 將來ながく頼みませよと常々言ひもしてみた

四 右大臣の四の君方から脅迫

かうのごけきにおだしくて、久しくまからざりしころ、此の見たまふるわた

一 源氏詞

二 中將詞

三 卑しい私には冷淡
になさつても、この子
には情をかけて

四 前裁に咲きまじる
花は皆よいか
五 古今草一歳をだに
すゑじとぞ思ふ植ゑし
より妹とわがぬるとこ
夏の花

りより、情なく、うたてあることをなむ、さるたよりありて、かすめ言はせたりける、のちにこそ聞きはべりしか。さる憂き事やあらむとも知らず、心には忘れずながら、せうそこなどもせで久しくはべりしに、むげに思ひしをれて、心ぼそかりければ、をさなきものなどもありしに、思ひわづらひて、撫子の花を折りておこせたりし」とて、涙ぐみたり。

「さてその文の詞は」と問ひたまへば、

「いさや、ことなることもなかりきや。」

山がつの垣ほ荒るどもをり／＼にあはれはかけよなでしこの露。思ひ出でしまゝに、まかりたりしかば、例のうらもなきものから、いと物おもひがほにて、荒れたる家の露しげきをながめて、虫のねにきはへる氣色、むかし物語めきておぼえはべりし。

「咲きまじる花はいづれとわかねどもなほこなつにしく物ぞなき』やまとなでしこをばさしおきて、まづちりをだに、など、親の心をとる。」

一 床うち拂ふ袖も涙に露けし、嵐吹くに四の君の脅迫を暗示し、常夏を枯らす秋に男心の飽きをかけた

二 (湖月) 頭中將のただえのつらさを思ひしるけしきをも恥る也

三 まだ生きてゐるなら、さぞあはれなからしであらう

四 愛してゐる間に、うるさいほどつきまとふ風があつたなら、かう行方知れずなどはさすまいに

五 しらずがほして、心では恨んでゐたとは知らずに、ずつと愛しつけてゐたのも

六 (評釋) 中將を思ひはなれずおのれとむねの焦るゝまで物おもふ夕べもあらむ

『うちはらふ袖も露けきとこなつに嵐吹き添ふあきも來にけり』と、はかなげに言ひなして、まめ／＼しく怨みたるさまも見えず、涙をもらし落しても、いとばつかしくつゝましげに、まぎらはし隠して、つらきをも思ひ知りけりと見えむは、わりなく苦しきもの、と思ひたりしかば、心やすくて、又どだえおきはべりしほごに、跡もなくこそ、かきけちて失せにしか。

まだ世にあらば、はかなき世にぞさすらふらむ。あはれと思ひしほごに、わづらはしげに思ひまつはす氣色見えましかば、かくもあこがらさざらまし。

こよなきとだえおかず、さるものにしなして、ながく見るやうもはべりなまし。かのなでし子のらうたくはべりしかば、いかで尋ねむと思ひたまふるを、今にえこそ聞きつけはべらね。

これこそ、宣たまひつるはかなきためしなめれ。つれなくてつらしと思ひけるも知らで、あはれ絶えざりしも、やくなき片思ひなりけり。今やう／＼忘れ行くきはに、かれはた、えしも思ひ離れず、をり／＼人やりならぬ胸こ

一 以下馬頭詞とする
説あり

二 指喰ひ女

三 木枯らしの女

四 撫子の母。本心が
わからず、他に男があ
るかといふ疑ひもかゝ

五 これはしもと難つ
くまじきはかたくもあ
るかな(二三頁)

六 吉祥天女、(湖月)
帝釋のむすめ瑞嚴の天
女也最勝王經にあり。

七 靈異記にその肖像に思
ひをかけた男の話があ
る

八 式部詞

八 藏人所の頭、一人
は太政官の辨、一人は
近衛府の中將の兼任、
宮腹の中將が頭兼任で
ある

がる、夕べもあらむ、と、おぼえはべる。これなむ、え保つまじく頼もしげ

なき方なりける。されば、かのさがな者も、思ひ出である方に忘れがたけれ

ど、さしあたりて見むには、わづらはしく、ようせずば、あきたき事もあり

なむや。琴のねすゝめりけむかごゝしきも、好きたる罪おもかるべし。

この心もとなきも、疑ひ添ふべければ、いづれと遂に思ひ定めずなりぬるこ

そ、世の中や。たゞかくぞ、とりとりに比べ苦しかるべき。このさまぐ

の、よき限りをとり具し、難すべきくさはひませぬ人は、いづこにかはあら

む。きちじやうてんによを思ひかけむとすれば、法氣づき、くすしからむこ

そ、またわびしかりぬべけれ。」とて、皆わらひたまひぬ。

「式部が所にぞ、氣色ある事はあらむ。少しづゝ語り申せ」と責めらる。

「しもがしもの中には、なでふ事か、聞しめし所はべらむ。」と言へど、どう

の君、まめやかに、遅し、と責めたまへば、何事をとり申さむ、と思ひめぐ

らすに、

一、もんじやうのしやう、式部省式「凡補二文章生一者、試二詩賦一、取三下第已上二」

二才、漢學

三博士、式部省大學寮の官職、教授課試を掌る

四「四座且勿飲、聽我歌三兩途一。富家女易嫁、家早輕三其夫一。貧家女難嫁、嫁晚孝三於姑一」白樂天、秦中吟、讖婚

五漢字ばかり、漢文の手紙、尺牘體

六腰折れ歌（腰句すなはち第三句に難點のある歌、轉じて腹く下手な歌）をもちつたのである

「まだ文章の生にはべりし時、賢き女のためしをなむ見たまへし。かの馬の頭の申したまへるやうに、おほやけ事をも言ひ合せ、わたくしざまの世に住まふべき心おきてを思ひめぐらさむ方もいたり深く、^三ざえのきは、なま／＼^三のはかせはづかしく、すべて口あかすべくなむはべらざりし。それは、ある博士のもとに、學問などはべるとて、まかり通ひしほどに、あるじの娘ども多かりと聞きたまへて、はかなきついでに言ひ寄りてはべりしを、親聞きつけて、^四盃もて出でて、我がふたつのみち歌ふを聞けとなむ、きこえごちはべりしかど、をさ／＼うちとけてもまからず、かの親の心をはぐかりて、さすがにかゝづらひはべりしほどに、いとあはれに思ひうしろ見、ねざめの語らひにも、身のざえつき、おほやけに仕うまつるべき道々しきことを教へて、いとさよげに、せうそこぶみにも、^五かななどいふ物を書きませず、むべ／＼しく言ひまはしはべるに、おのづからえまかり絶えで、その者を師としてなむ、わづかなる腰折れ文つくる事など習ひはべりしかば、今にその思は忘れ

一 妻子
二 無才

三 障子などを隔てて

四 賢人

五 道理

六 普通の女は低聲な
のに

七 風病

八 極熱草藥、にんに

く、暑氣ばらひにも使
ふゆゑの名、春記「服三
菲草「依風病」也」

九 「評釋」これもきす
くにけざくといへる
詞也

はべらねど、なつかしきさいしとうち頼まむに、むさいの人、なまわらなら
むふるまひなど見えむに、はづかしくなむ見えはべりし。まいて君達の御た
めには、さしもはかしくしく、したゝかなる御うしろみは、何にかせさせた
まはむ。はかなし口惜しと且つ見つゝも、たゞ我が心につき、宿世のひく方
はべるめれば、をのこしもなむ、仔細なきものははべるめる」と申せば、残
りを言はせむとて、「さてくをかしかりける女かな」と、すかいたまふを、
心は得ながら、鼻のわたりおごめきて語りなす。

「さて、いと久しくまからざりしに、ものたよりに立ち寄りてはべれば、常
のうちとけりたる方にははべらで、心やましき物ごしにてなむ會ひてはべり
し。ふすぶるにやと、をこがましくも、又、よきふしなりとも、思ひたまふ
るに、此のさかし人^(四)はた、かろくしき物怨じすべきにもあらず。世の^(五)だう
りを思ひとりて、うらみざりけり。聲^(六)もはやりかにて言ふやう、『月ごろ、ふ
びやう重きにたへかねて、ごくねちのさうやくをぶくして、いと臭^(九)きにより

一 雑事等、このやうに漢語を使ふのも普通の女らしくない

二 古今二十「わがせこが來べき宵なりさゝがにの蜘蛛の振舞かねてしるしも」晝間、蒜の香のうせる間

なむ、え對面たまはらぬ。まのあたりならずとも、さるべからむこざふじらは承らむ』と、いとあはれに、むべくしく言ひはべり。いらへに何とかは言はれはべらむ。たゞ、『うけたまはりぬ』とて立ち出ではべるに、さうくしくやおぼえけむ、『この香うせなむ時に、立ち寄りたまへ』と、高やかに言ふを、聞きすぐさむいとほし。しばし立ち休らふべきに、はたはべらねば、げに、そのにほひさへはなやかにたちそへるも、すべなくて、逃げ目をつかひて、

『さ三ゝがにのふるまひしるき夕暮にひるますぐせと言ふがあやなさ、いかなることつけぞや』と言ひもはてず、走り出ではべりぬるに、追ひて、

『逢ふことの夜をし隔てぬ仲ならばひるまも何かまばゆからまし』

さすがにくちとくなどははべりき』と、しづくと申せば、君達あさましと思ひて、『そらごと』とて笑ひたまふ。『いづこの、さる女があるべき。おいらかに鬼どこそむかひわたらめ。むくつけきこと』と、つまはじきをして、『言

- 一 式部詞
 二 尾本「とてなり」
 三 馬頭詞
 四 史記・漢書・後漢書
 五 詩・書・易經・春秋・禮記

六 「評釋」女文に漢字を過半(六)まぜて書く也やはらかなるべきにかたき字を交る故にすくめとはいへる也

七 故事。「夜をこめてとりのそらねははかるとも世に逢坂の關はゆるさじ」の類

はむかたなし」と、式部をあはめにくみて、「少しよろしからむ事を申せ」と責めたまへど、「これ(二)よりめづらしき事はさぶらひなむや」と(三)ておりぬ。

「(三)すべて男も女も、わるものは、僅かに知れる方のことを、残りなく見せつくさむと思へるこそ、いとほしけれ。三史五經(四)の道々しき方を、明らかに悟り

あかさむこそ、あいぎやうなからめ。なごかは、女と言はむからに、世にあることの、おほやけわたくしにつけて、むげに知らずいたらずしもあらむ。

わざと習ひ學ばねども、少しもかごあらむ人の、耳にも目にもとまる事、じ

ねんに多かるべし。さるまゝには、まんなを走り書きて、さるまじき(六)ごちの

女ぶみに、なかばすぎて書きすくめたる、あなうたて、この人のたをやかならましかば、と見ゆかし。こゝちにはさしも思はざらめど、おのづから、こ

はぐしき聲に讀みなされ、なごしつゝ、ことさらびたり。これは上臈の中

にも多かる事ぞかし。歌よむと思へる人の、やがて歌にまつはれ、をかしき(七)ふるごども初めよりとりこみつゝ、すさまじきをりゝ、よみかけたるこ

一 あやめ(菖蒲)、五月五日の縁語
 二 あやめの根を趣向にした歌をよみかけ。根、引き掛け、あやめの縁語
 三 重陽の節會には漢詩を御前で作るのて、そのこと心が一杯なかに、菊の露に涙をきかせた歌をよみかけられたは、思ひがけぬ返歌の苦しみをせねばならない
 四 五日九日でなくともよい歌だし、あとでゆつくり考へれば、よい歌なのに

そ、ものしきことなれ。返しせねば情なし。えせざらむ人ははしたなからむ。さるべき節會など、さつきのせちに急ぎ參るあした、何のあやめも思ひしづめられぬに、えならぬ根を引きかけ、九日の宴に、まづ難き詩の心を思ひめぐらし、いとまなきをりに、菊の露をかこちよせ、などやうの、つきなき營みにあはせ、さならでも、おのづから、げに、のちに思へば、をかしくも、あはれにも、あんべかりけること、そのをりにつきなく目にもとまらぬなごを、おしはからずよみいでたる、なか／＼心おくれて見ゆ。よろづの事に、なごかはさても、と、おぼゆるをりから時々、思ひわかぬばかりの心にては、よしばみ情たゞざらむなむ、めやすかるべき。すべて、心に知れらむ事をも、知らずがほにもてなし、言はまほしからむことをも、ひとつふたつのふしは、すぐすべくなむあんべかりける」など言ふにも、君は、人ひとり
 の御ありさまを、心のうちに思ひ續けたまふ。これは、足らず、また、さしすぎたることなく、ものしたまひけるかな、と、ありがたきにも、いとゞ胸

ふたがる。いづかたによりはつともなく、はてくはあやしきことどもにな
りて、明かしたまひつ。